

左：シュロとエビネ

絶滅危惧種のエビネ（内）と、逸出のシュロ（手前）。エビネのような絶滅危惧種の生育環境、そして、逸出した園芸植物の温床。都市やその近郊の雑木林ならではの光景である。



右下：シュロの繁茂

多摩某所の雑木林の林内。古い時代の帰化とされる中国原産のシュロであるが大繁茂している。この林分ではシュロの他にも、カクレミノ、ヒイラギナンテン、ヤツデ等、多摩地域を自然分布域としない園芸植物由来の逸出個体が多く見られる。

アオギリ、トウネズミモチ、ヒイラギナンテン、イチヨウ、ナツミカン、えっ、あれ!? キウイ・・・

ナツミカンやキウイは言わずと知れた果物。そして、アオギリ、トウネズミモチ、ヒイラギナンテンなどは、庭園や公園に街路樹として、よく植栽される外国産の樹木であることをご存知の方も多いことでしょう。

ところで上記の6種ですが、いずれも、雑木林(コナラ二次林)において、現在見られる種です(必ずしも量が多いとも限りませんが)。この話を聞くと驚かれる方も多いようです。

現在、多摩、武蔵野、狭山地区において、都市近郊コナラ二次林の植物相を調べていますが、上記の種群はもとより、本来は自生していないはずのヤツデやカクレミノなど、海岸近くを故郷とする園芸樹木も非常に目につきます。

こうした、雑木林に居着いてい

ある日のフィールド・ノートから

雑木林の異邦人たち

る、園芸樹木ですが、多くは晩秋から冬季に結実する植物たちです。なぜ、こうした種が都市近郊コナラ二次林に見られるのか(山深い林内では見られません)。この現象の理由として、いわゆる都市鳥といわれるヒヨドリやムクドリなどが、餌が不足する冬季に、住宅庭園や公園、街路樹として植栽された個体の実を食べ、その後、雑木林の林内に滞留している間に糞をして種子を散布する、ということが指摘されています。

上記の現象は、鳥類の生息空間確保という観点からすると歓迎されることなのかも知れません。トウネズミモチやヒイラギナンテンなどは、結実も多く見られ、新たな餌資源としても機能していることでしょう。しかしなが

ら、わずかに残された、都市及び近郊のコナラ二次林を特徴づける植物の保全という観点から見ると、こうした園芸種は必ずしも歓迎されない「招かざる客」です。なぜなら、これらが生長することによって、保全したいコナラ二次林を特徴づける種の生育が圧迫される可能性があるためです。厄介なことに、保全のために林内を放置すれば放置するほど、これらの「招かざる客」も増えてしまうのです。

自然再生事業がスタートし、雑木林の再生も重要なテーマとなっていますが、鳥類の生息環境としての機能を重視するか、植物相を保全するのか - つまり保全のシナリオをどのように描くかは非常に悩ましい問題です。

また、雑木林単体で考えれば良いのではなく、周辺の人工緑化空間との結節関係にも着目していく必要もあり、ない知恵をしぼる日々が続くそうです。

(東京本社技術営業室・根本 淳)

ご意見 ご質問
お待ちしております

素朴な疑問やご感想など下記のアドレスまでお寄せください。お待ちしております。

E-mail :nl-info@chiikan.co.jp

編集後記

最近よく耳にする言葉...「地域連携、市民参画、NPO...」一昔前、どちらかといえば相反する立場であった行政と市民活動団体が同じ方向を向きつつあるようです。

「協働」をキーワードに行われた企画や事業に少し関わった感想として、今はまだシステムがなんとか形を整えつつある段階のように感じています。それぞれ関わる立場の人たちが「自分たちがやるべきこと、やりたいこと、できること」をきちんと認識した上で協働していけたら次の段階に進むのかなと期待しつつ、これからも地域の市民活動に参加していきたいと考えています。
(中山 香代子)

News Letter NO.21 2004年2月

【発行】.....株式会社地域環境計画

発行人.....高塚 敏

編集中山香代子・根本 淳・鈴木志保子・釣谷佳子・高岡由紀子

東京本社 〒154-0015

東京都世田谷区桜新町2-22-3 NDSビル

TEL 03-5450-3700 / FAX 03-5450-3701

営業窓口...鈴木志保子・根本 淳・高岡由紀子

大阪支社 〒569-1123

大阪府高槻市芥川町1-15-18 ミドリ芥川ビル

TEL 072-684-3182 / FAX 072-684-3184

営業窓口.....中山香代子

北海道支社 〒001-0017

北海道札幌市北区北17条西5-20-303

サンオービルF

TEL 011-717-8001 / FAX 011-717-8021

営業窓口.....中島正雄